

# 古 代

飛鳥 奈良 平安時代

## < 時代概説 >

野田市は、古代より近世に至るまで下総国(しもうさのくに)に属していました。特に、古代の国域は広く、今日の千葉県域をこえて、東京都・埼玉県・茨城県の 1 都 2 県に及んでいました。旧郡・区名で示すならば、北は茨城県の西南部にあたる結城・猿島・北相馬の 3 郡を、西は埼玉県北葛飾郡と東京都葛飾・江戸川・墨田・江東の 4 区を版図とし、現中川や隅田川をもって国境としていました。なかでも、墨田区の両国は、そのことを物語る地名として有名になっています。

古代の下総国は、全国 66 か国 2 島のうち、最大級の国に与えられる大国の一つにランクされていました。国の中枢となる「下総国府(こくふ)」は、現市川市国府台(こうのだい)に置かれ、国府内に建てられた国の役所である「国衙(こくが)」においては、中央から派遣された「国司(こくし)」が政務をとっていました。「倭名類聚抄(わみょうるいじゅうしょう)」によれば、下総国の管下には、11 郡があって、野田は葛飾郡内に位置を占めていました。さらに、郡内には 8 つの郷が存し、野田は、そのうちの、「度毛郷(とものごう)」に比定されていますが、詳細はわかっていません。

平安時代の前期の頃、東海道の終点、常陸国府(ひたちこくふ)(現茨城県石岡市)に通ずる幹線道路が、野田の南、約 10 キロのところを走っていました。このコースは、下総国府を北上し、手賀沼の北岸を経由して常陸国府へ向かったものといわれています。柏市藤心付近に茜津駅(あかねづえき)が置かれていたと推定され、さらに、古代遺跡調査の結果、於賦駅(おぶえき)が手賀沼の北岸、我孫子市新木付近に所在したことが確かめられたので、東海道はこのあたりを通過していたと考えられます。のちになると、下総国府を経由せず、武蔵国から直接、茜津駅に至り、於賦駅を経て、常陸に向かうコースに変わっています。いずれにしても、野田の近くに、東海の大道路が通じていたことが注目されます。

この頃にあたる奈良・平安時代の集落跡が、市内の岡田・新宿・桐ヶ作・木間ヶ瀬・松ノ木・尾崎・岩名・二ツ塚・清水・山崎・目吹・三ツ堀などから発見されており、その多くが江戸川沿いの台地に営まれていました。これら遺跡のうち、岩名地区の一ノ坪・五木地区の宝蓮坊(ほうれんぼう)の両遺跡から製鉄関連の遺物が出土し、注目されています。また、山崎地区の東大和田遺跡からは、「真」「吉」と書いた墨書(ぼくしょ)土器が検出され、貴重な文字資料として見逃せないものとなっています。

承平 5 年(935)より天慶 3 年(940)にかけて、下総国豊田・猿島・相馬の 3 郡を本拠とする平将門(たいらのまさかど)が乱を起こしています。

平安時代の末期に入ると、本地方にも、寄進地系荘園(きしんちけいしょうえん)の成立が見られます。大治 5 年(1130)には、伊勢神宮領(いせじんぐうりょう)となる相馬御厨(そうまのみくりや)が成立し、その西端は野田市域に及んでいました。

また、相馬御厨の西側にあたる市域の大部分は、皇室御領となる下河辺庄(しもこうべのしょう)が広がっていました。

年代	主な出来事
飛鳥時代 (593 ~ 710) 大化元年 (645) 大宝元年 (701)	大化の改新 下総国葛飾郡国府台(現市川市)に国府がおかれ、市域はこの管轄下に置かれる 大宝律令の制定
奈良時代 (710 ~ 794) 和銅3年 (710)	都を平城京(奈良)に遷す
平安時代 (794 ~ 1185) 延暦13年 (794)	都を平安京(京都)に遷す  前期：常陸国府に通ずる 幹線道路が野田の南10キロあまりのところを通る  9世紀後期： 山崎東大和田遺跡の墨書土器(墨で文字がかかっている)
承平5年 ~ 天慶3年 (935 ~ 940)	平将門の乱(天慶の乱)の発生
大治5年 (1130)	相馬御厨(そうまみのくりや)の成立  この頃市域は相馬御厨や下河辺庄(しもこうべのしょう)に含まれる



東大和田遺跡墨書土器



平将門像(国王神社所蔵)